

序論)

みなさんは教会暦をご存知でしょうか。アドベント、クリスマス、レント、受難節、イースター、ペンテコステ このように一年を通して【主】の御業に関することを記念し、礼拝することを決めたカレンダーのことを教会暦といいます。

今あげたクリスマス、イースター、ペンテコステといった行事はみなさんよくご存知のことだと思いますが、教会暦は実はそれだけではなくってカトリックでは聖人とされた人々のことを覚える聖人の日があったり、イエス様が神の子として顕現された日を礼拝する日があったりします。また、日本のプロテスタントの教会ではあまりやっていないのですが、ペンテコステの週の次の日曜日を三位一体の【主】の日として、神様を礼拝する日も教会暦には定められています。

聖書には三位一体ということばはありません。パウロが、ローマ人への手紙や、ガラテヤ人への手紙を通して救済論を書いているような、三位一体の理屈を聖書が論理的に説明している箇所もありません。

にもかかわらず、教会は神様が三位一体のお方である。ということを知る礼拝をしようと定めたのです。なぜでしょうか？ それは私達が信じる神様はまさに三位一体の神様だからです。

今イスラエルがハマスから攻撃を受けたことで、その報復攻撃をガザの自治区にしようとしています。その影響でにわかにネットの世界ではユダヤ教とキリスト教とイスラム教の宗教戦争だ。などと騒いでいる人がいたりしますが、多くの聖書を知らない人たちは「ユダヤ教も、キリスト教も、イスラム教も元をたどれば同じ神様を信じているのだから、仲良くすればいいじゃん。」と言います。でも、これは間違った認識です。なぜならば、神様とは三位一体のお方だといっているのは、キリスト教だけであり、ユダヤ教もイスラム教も神様とは父なる神様お一人であって、子なるキリスト、御霊なる聖霊が神様とは認めていないのです。

だから、ユダヤ教とキリスト教とイスラム教が同じ神様を信じているとはいえないのです。

それとは逆にキリスト教にはカトリック、プロテスタント、正教会という宗派があってそれぞれを比べてみると、信仰のあり方がだいぶ違うことがわかります。しかし、それにも関わらず、カトリック、プロテスタント、正教会が同じキリスト教

だといえるのはなぜかと言うと、どれも三位一体の神様を信じているからです。教義も違う、礼拝の仕方も違う。それでも三位一体の神様を信じているから、私達はキリスト教だとカトリックもプロテスタントも、正教会も言うのです。

そして、自分たちでは私達はキリスト教だと言いながらも、実際は異端とされている人たちがなんでキリスト教と認められないのかというと、彼らは三位一体の神様を信じていないからです。例えば富川にいるエホバの証人の方々は、自分たちはキリスト教だと言っていますが、神と呼べるのはエホバだけであって、イエスキリストは、大天使ミカエルなのだと言っています。また、聖霊は人格を持っている存在ではなくってただの力だということです。

また、同じ異端として有名なのがモルモン教・正式には「末日聖徒イエス・キリスト教会」といいますが、彼らは父、子、聖霊というのは認めるのですが、彼らはこの3つの父、子、聖霊が一つの神様とは信じていません。それぞれ独立した存在だと考えていて、父と子のみが物質的な体をもっていて、聖霊だけが霊的な存在だと。そのような理解をしています。

このように三位一体の神様を信じているかいないか。によって同じ神様を信じているか、いないかが明確に分けられるのです。だから、私達は、神様は三位一体の神様であるということを理解していなければいけないし、私たちはその三位一体の神様に向かって賛美をし、祈りをし、礼拝を捧げていなければいけないのです。

ある意味ではこれこそが、私達がキリスト教である。聖書が教える神様を信じていることを証明する一つの目安でもあるのです。

ですから、みなさん、私達が信じる神様が三位一体の神様である。ということを強く意識していただきたいと思います。

### 三位なる神様)

では、そもそも三位一体とはなんなのか？ということですが、これは簡単に言えば聖書が教える神様は、父、子、聖霊という3つの位格・・・人間的に言えば人格をもっているけども、一つの神様。ということです。

ただ誤解しないでいただきたいのは、神様は多重人格の神様というわけではないということです。医学用語で多重人格は解離性同一性障害といたりするみたいですけども、人間でも色々な過去のトラウマによって、自分を守るために複数の人格を作って生活してしまうという人がいるみたいですけども、三位一体の神様という

のはそういうこととはちょっと違います。もし神様が多重人格の人みたいに一人の体に複数の人格があるというようなお方だったら、一つの場面にそれぞれの人格が同時に存在することはできません。

ところが、今日読んでいただいたマタイの福音書を読んでいただくとどのような場面がえがかれているかという、もう一度読んでみたいと思います。

**3:16** イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。

**3:17** そして、見よ、天から声があり、こう告げた。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」

みなさん、これはイエス様がバプテスマのヨハネから洗礼をお受けになったときの出来事ですけども、ここには誰が登場してきていますか？

まずは洗礼をお受けになったイエス様がいます。次には天が開いて神の御霊が・・・つまり、聖霊様が鳩のようにイエス様の上に降りてこられたのです。

そして、どうなりましたか？ 天から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」声があったわけです。この声を出したのは誰ですか？父なる神様です。

神様がもし人間の多重人格みたいな存在だったら、このゆう風には現れることができません。なぜならば、この場面だけをみると完全にイエス様と、父なる神様と聖霊様が別々に存在されていることがわかるからです。

### 一つなる神様)

じゃあ、モルモン教がやっているように神様は三人いて一つの神様ではないということが正しいのではないか。という話になるかもしれませんが。

みなさん、神様が一番嫌われる罪ってなんですか？ 聖書の中で人が犯した罪として一番に問題視されている罪ってなんですか？ そう偶像礼拝ですよ。

神様は十戒の中で一番はじめにこのように言われました。

### 出エジプト記

**20:2** 「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。

**20:3** あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。

神様は自分以外の存在を神とすることを駄目だ！と明確に言われています。

だから、もし子なるキリスト、御霊なる聖霊様が、神様とはまったく別の独立した存在であったならば、神様のこの命令は成り立たちません。

さらに神様は子どもたちに神様のことを教えるためにシェマーというものを、家の門の柱とか、門そのものに書かせて、更には額の上のにせる御札みたいなものにもかかせて、これを絶えず唱えさせなさいと教えられました。それが申命記 6 章にかかれています。ちょっと読んでみましょう。申命記 6 章 4-9 節

**6:4** 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。

**6:5** あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。

**6:6** 私が今日あなたに命じるこれらのことばを心にとどめなさい。

**6:7** これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家で座しているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。

**6:8** これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。

**6:9** これをあなたの家の戸口の柱と門に書き記しなさい。

神様が絶えず子どもたちに言って聞かせて、家に刻みなさいといわれたのは、4 節と 5 節のみことば

**6:4** 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。

**6:5** あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。

【主】が唯一であるといことを、寝ても覚めても歩いている時もずっと言っていない。とそう【主】はいわれたのです。

だから、イエス様のバプテスマの時には、確かに父なる神様、子なるイエス様、御霊なる聖霊様が別々に存在しておられたけども、それでも神様は唯一だったのです。

これはまさに矛盾していてありえないことです。

でも、聖書が教える神様をそのまま受け入れようとするならば、この人間的にはありえない状態で存在されるお方が、聖書の神様、唯一まことの神様であることを認めなければいけません。

これを私達人間が理解できるようにしようとすると、エホバの証人みたい神様はエホバであって、イエス様、聖霊様は神様ではない。って事になったり、モルモン教みたいに神様は父、子、聖霊として存在しているけども、一つの神様ではない。というように聖書が教える神様とは違う神様の姿にしてしまうのです。

私はこの三位一体のメッセージを用意するにあたって、色々な他の先生方の三位一体についてのメッセージを調べてみたりしました。しかし、その中に聖書が教えている神様を人間的な視点で納得できるように表現しているメッセージは一つもありませんでした。寧ろ、そのように自分たちが理解できるように三位一体を表現しようとするのが危険だよ。とっているメッセージのほうが多かったのです。

ある先生はこうゆうことをいっています。『海岸である少年が波打ち際で一生懸命穴をほっていたそうです。でも、掘っても掘っても波がくる度にその穴は埋まってしまう。それでも少年は一生懸命穴をほっていました。だから、その先生はその少年にいったのです。「何をしているの？」って、すると少年はこう答えたそうです。「この海を入れる穴を僕は掘っているんだ」。そういわれて、三位一体をどのようにみんなに理解してもらおうかと考えていた先生は、「ああ、自分がやろうとしている、人に理解できるように三位一体を伝えようとするのは、この少年がやっているように果てしない海を小さな穴にいれようとしているようなものなのだ」とそう理解した』そうです。

みなさん、この世界をお造りになった唯一の神様は、父、子、聖霊という3つの別々の位格をもったお方だけど、それでも一つの神様なのです。これは私達が納得できるように理解しようとするよりは、聖書が教える神様はまさにそのようなお方であると、そのまんま信じるのが大切です。

なぜならば、神様は私達の理解の枠には収まらないお方だからです。

**なぜ三位一体なる神様を知らなければいけないのか)**

では、なぜ私達の理解をこえたお方なのに、わざわざ三位一体ということばを作ったまで、神様はそのようなお方であることを理解しなければいけないのでしょうか。

それは私達の救いも、宣教も、祝福も、まさにこの三位一体の神様の御業だからです。

もう一度、先程のマタイの福音書の3章16節、17節を読んでみましょう。

**3:16** イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。

**3:17** そして、見よ、天から声があり、こう告げた。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」

イエス様がバプテスマをお受けになったときに、【主】はわざわざイエス様と聖霊様と父なる神様の存在をしめされました。なぜでしょうか？ それは、ここからはじまるイエス様の救いの御業は、イエス様だけの働きではなく、父、子、聖霊なる三位一体の神様の御業だったからです。キリストによる救いは三位一体の神様の御業です。

さらにイエス様が十字架と復活の御業をされて天に昇るときなんといわれましたか？ マタイ 28 章 19 節、20 節

**28:19** ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、

**28:20** わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」というのは、いわゆる大宣教命令ですよ。この大宣教命令を実際に実践しようとするならば何をしなければいけないかというと、父、子、聖霊の名によってバプテスマを授け、【主】が命じられたことをすべて守るように教える事です。

つまり、宣教は三位一体の神様による洗礼を授けることを最初の目標としているのです。

さらには私がよく祝祷でつかっていることば、「【主】イエスキリストの恵み、父なる神様の愛、聖霊なる神様との親しい交わりが、私達一同とともにありますように」というあのことばはですね。

第二コリント 13 章 13 節にあるパウロがつかった祝福のことばです。

## 第二コリント 13:13

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともに

ありますように。

みなさん、私達の祝福もですね。この三位一体の神様の恵みと愛と交わりにかかっているのです。逆にいうとですね。この三位一体の神様の恵みと愛と交わりがなかったら、私達は祝福はないのです。

だから、ある意味ではキリストは恵みを示すお方であり、神様は愛を示すお方であり、聖霊様は交わりを与えるお方と理解してもいいと思います。

そして、さらに創世記やヨハネの福音書 1 章をみると、この世界の創造は三位一体の神様の御業であることがわかります。

### 創世記 1 章 1 節、2 節

1:1 はじめに神が天と地を創造された。

1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。

神様が天と地を創造されたのだけど、神の霊がそこにいて創造の御業がそこからはじまったことが書かれています。次にヨハネの福音書を見てみましょう。

### ヨハネの福音書

1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

1:10 この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

これをみるとことばとして神様と共におられた神様であるイエス様が、世界をお造りになり、光としてこられて、ひとり子の神として神様を解き明かされた。ということがわかります。

天地創造のとき、神様は神の霊としてそこにおられ、ことばなるイエス様としても共におられてこの世界をお造りになったのです。

でも、人々は神様のことを理解できていないから、ひとり子の神様が、神様のことを解き明かすためにこの世にきてくださった。それがイエス様なのです。

このように聖書をみると、天地創造も三位一体の神様の御業だし、救いも神様の御業だし、宣教も神様の御業であり、結局のところ、私達がうけているすべての恵みは三位一体の神様によってなされていることがわかります。

だから、私達は神様のことを三位一体の神様として信じ、賛美、礼拝するのです。

まとめ)

みなさん、三位一体の神様はわたしたちを創造し、わたしたちを救い、わたしたちに洗礼を授け、私達を宣教へ導かれます。

神様は三位一体の神様だからこそ、私達はユダヤ教の神様を信じているのでもないし、イスラム教の神様を信じているのでもないのです。

みなさん、お祈りをするとき、賛美するとき、礼拝をするとき、是非、この三位一体の神様を意識して祈りし、賛美し、礼拝をしてください。特に祈るときに、天の父なる神様、聖霊様、そして、イエス様、この三位一体の神様に呼びかけながら祈っていただきたいと思います。

私達はこの三位一体の神様が、イエスキリストの恵みと神様の愛と聖霊様による交わりをくださることを信じて、感謝して歩んでいきましょう。